

毎月11日掲載

防災・減災のページ

第90回福井新聞社と共催 @福井・三国

むすび塾

1カ所目は海水浴場の三国サンセットビーチから約500m離れた一時避難場所の春日遊園地(海抜23・1m)まで、急勾配な住宅密集地の路地を移動した。急に道幅が狭くなる場所もあり、参加者が道を間違えたり車いすが段差につまずいたりする場面もあった。

全員7〜8分で避難を完了し、目標の10分以内に到達できた。

急勾配狭い路地に苦慮



津波を想定して高台へと避難する参加者
6月29日午前9時55分ごろ、福井県坂井市三国町

三国町地区はかつて北前船の寄港地として栄えた観光名所。年間100万人超の観光客が訪れる名勝・東尋坊もある。県の想定では、若狭湾沖で福井地震(1948年6月28日)と同規模(マグニチュード7級)の地震が起きた場合、最大8・68mの津波が押し寄せるとされる。

模擬避難訓練は、三国町地区内の2カ所で行われ、町内会関係者や家族連れ、高齢者ら約30人が参加した。地元の福井工大生は、車いす利用者や支援者などの役割を決めて臨んだ。

1カ所目は海水浴場の三国サンセットビーチから約500m離れた一時避難場所の春日遊園地(海抜23・1m)まで、急勾配な住宅密集地の路地を移動した。急に道幅が狭くなる場所もあり、参加者が道を間違えたり車いすが段差につまずいたりする場面もあった。

歴史ある港町津波想定し避難訓練

河北新報社は6月29日、福井県坂井市の三国町地区で90回目となる防災・減災ワークショップ「むすび塾」を開いた。福井新聞社(福井市)との共催。ワークショップと併せて住民を交えた模擬避難訓練も実施し、日本海と九頭竜川河口に面した港町の津波の危険性を改めて確認、今後への備えについて話し合った。

むすび塾に参加して



●多様な想定必要 町内会で避難訓練に10年以上携わっている。災害はいつ起こるか分からない。高齢者や障害者も安全に避難できるように多様な想定が必要だ。夜間に備え、地区行事の記念品にはソーラライトを出している。災害時の備品を蓄えることも大切だ。雄島まちづくり協議会長・鹿島潤司さん(60)

●命は自分で守る 家族で避難訓練に参加した。津波が来たらどこに逃げようか。子どもたちや他地域出身の妻に命が助かるか否かの重要な場面になるだろう。子どもは「自分の命は自分で守る」と教えており、改めてその大切さを認識した。旅館経営・伊藤俊輔さん(31)

●地域へ備え訴え 語り部の話から、災害時は自分の命を守れないと他人も助けられないと痛感した。福井地震から年月がたち、地域の防災意識は薄れている。牛乳パックを使った非常食セットづくりを仲間と小学校で教えている。備えの大切さを地域に伝えた。坂井市赤十字奉仕団三国分団長・明新美千代さん(74)



●高齢者避難課題 町内には寝たきりのお年寄りもいる。誰がどの人を助けるのかルール化はされているが、いざという時に助けられるのかどうか心配だ。自分や家族の避難とどのように両立させたいのか悩ましい。住民と一緒に考えたい。みくに地区まちづくり協議会防災・安心部会長・中山晴男さん(70)

●命を守る議論を 自宅は海抜約11mの場所にあるが、東日本大震災の話や津波の話を聞いて不安だ。小学校の学区や町内会単位で避難先を決めているため、近づくに避難所があるのにはわざわざ遠くに避難する人もいない。一人一人が命を守るため、備えを真剣に考えなければいけない。一般社団法人職員・平林淳子さん(57)

●住民の交流大切 住民が身近なところから備え、地域で問題意識を共有することが大事だと思った。私の住む地区はマンションが建ち新住民が増えている。普段の交流がなければ防災に繋がらない。話合おうとできない。まずは住民同士のつながりをつくる方法を考えたい。三国地区長・大崎史之さん(64)

●住民と交流率先 海水浴には来るが、高台の住宅街に入ったのは、今回の訓練が初めて。災害時に若者も近所の助けができれば、普段からあいさつすることが大切だと感じた。将来、地元で長年住んで父親が営む土木会社を継ぐので災害に強い地域づくりに貢献したい。福井工大4年・原山千穂さん(21)

●学び生かしたい 大学で防災を研究している。訓練では車いすによる避難の様子をカメラで記録した。車いすを押すのが大変そうだった。また高台への道順を知らせる表示板がなく、住民以外はどこにどう逃げたらいいのか分からないと感じた。経験を備えに生かしたい。福井工大4年・真鍋崇人さん(21)

三国町地区 九頭竜川河口部の港町



むすび塾が開催された三国町地区は、有史以来、沓瀬を繰り返してきた九頭竜川の河口部に位置し、北前船の寄港地として繁栄した三国港がある港町だ。三国港は、野蒜(東松島市)、三角(熊本県宇城市)と並び、明治政府が手掛けた港湾整備事業「日本三天築港」の一つにも数えられる。

三国町は2006年に近隣の丸岡、春江、坂井3町と合併し、人口約9万の坂井市となった。歴史ある港町として発展した三国町地区(人口約2万)は、旧商家や住宅が密集した趣深い街並みを現在も残している。

越前カニやアマエビの水揚げ地として知られるほか、全国的にも有名な名勝・東尋坊は年間を通じ多くの観光客でにぎわう。一方で地区沿岸

観光客の避難課題

部への津波第1波到達時間は地震発生から最短で7〜14分とされ、住民や観光客がいかに早く避難行動を開始し、高台へ移動できるかが重要となる。



狭い住宅地を抜けて避難場所の高台へと向かう参加者
6月29日午前9時10分ごろ、福井県坂井市三国町

定避難場所の三国南小(海抜21・0m)を目指した。周囲は、北前船で繁栄した豪商の屋敷など当時の生活様式を伝えるレトロなたたずまいが残る。町歩きを楽しむ観光客の姿もあつた。

交通量の多い県道を車を気にかつた。東日本大震災の被災体験者として参加した石巻市の東北福祉大3年志野ほのかさん(20)は「避難訓練中、海の様

避難を終えるのに12分ほどかかった。土地勘が無いので1人で歩いたら、どちらに逃げたらいいかわからない」と振り返った。

子どもが全然見えなくて怖かった。土地勘が無いので1人で歩いたら、どちらに逃げたらいいかわからない」と振り返った。

避難ルート複数設定を



福井工大工学部教授 竹田 周平さん(48)

訓練は避難先が遠く、参加者はゆっくり逃げていた。だが、津波はすぐ到達する。初めは早足で逃げ、坂道で呼吸を整えて上ることを意識してほしい。

道中は海抜表示板が目立つたが、避難先を知らせる標識は見当たらなかった。「この路地が危ない」といえる。毎年同じシナリオではなく、次の行動を参加者自身で考えてもらう訓練に工夫すると、なお効果的だ。参加者は体験を家族や周囲の人に伝え、地域の防災力を高めたい。

官民学連携 減災の近道

■ 専門家から

東日本大震災で津波火災の現地調査をした。火の付いたがれきの漂流や油の流出、電気系統の火出などが原因とみられる。避難ビルに入り内部空間を燃やすなどの延焼リスクが難点だ。

ただ、震災では津波火災より津波そのもので亡くなった人が圧倒的に多かった。津波火災を恐れる余り、高所に通ける垂直避難を考へ、専門家が集まる場を作り、つなぐことが道回りのリスクマネジメントとして、よって防災減災の近道だ。

命と地域を守るには、無理をしないで継続することが大切。イベントに若い人が参加するだけで地域の防災力は向上する。住民、行政、専門家が集まる場を作り、つなぐことが道回りのリスクマネジメントとして、よって防災減災の近道だ。



東大工学部准教授 広井 悠さん(40)